

第4回日本赤十字看護学会学術集会 テーマセッション Ⅲ

看護実践能力育成のための実習指導

Clinical Teaching to Develop Student's Nursing Competence

司会	平木 民子	HIRAKI Tamiko	(日本赤十字広島看護大学)
話題提供者	渡辺 春美	WATANABE Harumi	(広島赤十字・原爆病院)
	吉田 みつ子	YOSHIDA Mitsuko	(日本赤十字看護大学)
	高橋 美佐子	TAKAHASHI Misako	(高松赤十字病院)
	唐澤 由美子	KARASAWA Yumiko	(長野県看護大学)



平木民子

実習指導は、学生の看護実践能力の開発を目的とした看護学教育の中核となる教育活動である。赤十字の看護教育は古くから実践を重視し、現場で学生を育てることは当然の責務としてきたが、大学教育に移行しつつある現在、専門学校での指導体制とは異なる点も多く、指導のあり方を模索している状況ではないだろうか。学生が理論と実践を統合しながら看護実践能力を身につけるためには、大学側と施設側の指導の連携・協働が重要な鍵を握っている。今回のセッションでは、実習成果を上げるための連携の実際や問題点、今後の課題について、4名の話者提供から伺うことができた。

看護大学の実習を受け入れて3年目になる臨床指導者・渡辺春美氏には、学生と看護スタッフが共に意義ある学びになるような、連携の実際について紹介して頂いた。また、大学教員・

吉田みつ子氏には、臨床指導に求められる能力とそれを補い合うための指導の連携、組織同士の連携のしくみづくりについて述べて頂いた。そして、大学の実習を受け入れて1年目の看護師長・高橋美佐子氏には、指導連携上の問題に対する看護師長の解決行動の実際について述べて頂いた。さらに、大学教員・唐澤由美子氏には、教員の実習施設での研修に関する調査結果を基に、実態を考察しながら、連携のあり方について示唆を述べて頂いた。

以上のように、様々な角度から話題提供して頂いた後、会場からは、実習記録の指導・看護技術の実習前準備・教員間で指導経験を共同検討する機会・看護スタッフの学生への関わりに対するフィードバックなど、発表者への具体的な質問や活発な意見交換がなされた。

人的環境づくりを意図した指導連携の実際

渡辺春美

プライマリーナーシング看護体制が定着してきた現在では、学生と看護スタッフが、看護実践を通して、互いに有意義な学びとなるような調整をすることが臨床指導者の重要な役割の一つだと考える。そのためには、それぞれの状況を把握している大学教員と臨床指導者が、密に話し合い連携することが必要になってくる。

受け持ち患者さんと自分の関係だけに着眼して、視野を狭くする学生がいるが、臨床の場においては、学生も一人の患者に関わる看護者の一員であることを認識し、自分の行っている看護行為が、その患者に行われる援助全体のどの部分なのか、という視点で考えさせることが必要だと思う。また、学生が、プライマリーナースの看護を見たり、看護方針について話し合ったりすることで、互いが、個性を重んじた看護を実践するための考えや方法について探究す

ることができる。例えば、ある学生が、看護師のケアを見て素晴らしいと感じ、どうすればあのようなケアができるのだろうか、カンファレンスで教員・臨床指導者・学生と共に話し合う。そして、臨床指導者は、その経緯を看護師に伝える。そこで改めて、看護師も自分の看護について考え表現する機会がもてるのである。また、学生の作成したケアプランをスタッフに発表して話し合うこともあるが、学生に何も意見を言わない場合や、厳しい指摘だけに終わる場合は、学生にとって有効な学びにはならない。学生とスタッフが自由に意見交換できるように、教員と臨床指導者は、双方のフォローをしていく必要がある。例えば、学生とスタッフのケアに対する考え方が大きく異なった時、その考えに至った経緯について、具体的に話し合い、学生の看護に対する見方や考え方が広がるような

状況を作ることが重要である。

このような実習を行うためには、まずは、臨床側が看護大学生と共に学ぶという受け入れ姿勢を作ることが必要である。実際、大学の実習を受け入れた当初、大学教育を受けていないスタッフが、学生にあれこれ言うのは良くないのではないかという雰囲気があった。臨床指導者の私としては、看護実践能力を向上させるという課題は、大学生も専門学校生も同じなのだということをスタッフに伝えた。そして、日々の実習のなかで、一人ひとりの学生を的確に把握している大学教員と、患者と看護スタッフの状況を具体的に把握している臨床指導者が、話し合いながら、双方が有効なコミュニケーションを図っていく必要がある。

しかし、学生が直接患者に看護技術を提供する場合の調整については、最近難しくなっ

たと感じる。臨地実習時間が短くなったことや、思考力や理論的な根拠を重視するためか、学生の技術の能力が低くなっていると感じることが多い。学生が事前学習も練習もしてこない場合は、看護師が実際場面で学生のフォローをしても、患者に不安を与えてしまうので、実施させるわけにはいかない。あるいは逆に、少し補助すれば、学生が実施できると思える時でも、受け持ち看護師によっては、患者の安全面やサービスの質の低下を懸念して、学生に実施させたくないという場合もある。学生が実践能力を身につけるためには、できるだけ学生に実践の機会を与えたいと思うが、そのためには、事前に確実に準備してくることを大学側や学生には求めたい。また、臨床側としては、患者の安全安楽を確保しながら、学生に実践機会を与えていけるような人的環境づくりをしていきたいと思う。

学生の体験を意義ある学びとするために

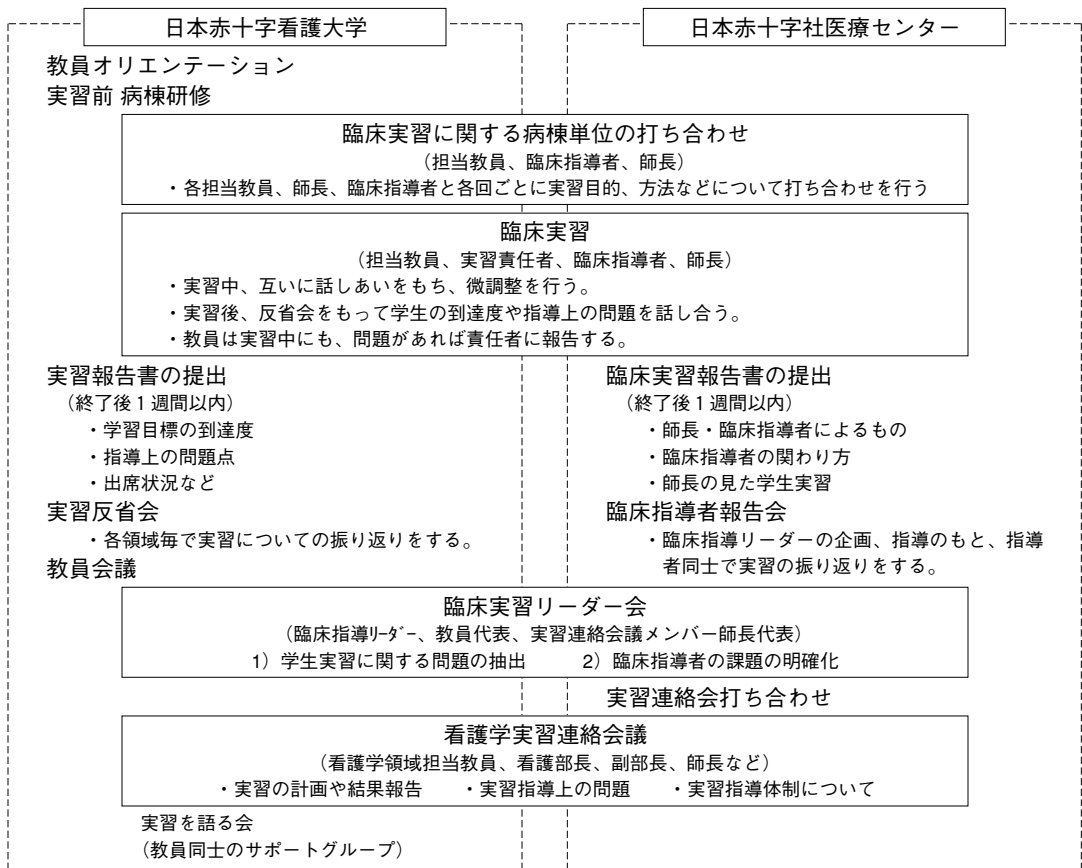
吉田みつ子

臨床指導を初めて6年目になるが、実際の個別状況の中で、指導者各々の役割やその分担をどう考え、実習の場をつくっていけばいいのか、試行錯誤が続いている。学生の臨床実習体験が意義あるものとなるかどうかは、学生個々の力のみならず、教員や臨床指導者の力、指導する者同士の役割関係も大きく影響する。学生・患者・教員・臨床指導者が、様々な局面で相互に影響し合いながら展開していく実習において、教員に求められる能力、教員と臨床指導者の連携について考えてみたい。

実習指導には、教育の分野における能力、臨床能力の2つが求められる。教育能力は、学生が患者との関係の中で問題を明確化し、問題の解決にむけてかかわれるような知的・情緒的な支援をする力と考えることができる。一方、臨床能力とは、看護の総合的な判断力や実践力である。実際の臨床実習指導では、どちらか一方の能力だけでは、十分ではなく、また教育能力と臨床能力が一体となった「してみせること」や

「してみせたことの意味を学生に伝える」という能力も求められる。

しかし、一人の指導者がバランスよく、2つの能力を持ち合わせるのは難しく、葛藤もある。例えば、「学生を教えること」よりも「患者のケアすること」を優先してしまうことがある。教育の分野に飛び込んで日が浅い時期や、教育能力よりも臨床能力が高い場合に起こりやすく、ウイデンバックは、「教師は学生に教えているときよりも患者をケアしているときの方が、もっと自信をもち、自分が有能だと感じて安心していられると感じる」(1972, p.16) からだと指摘する。臨床能力が十分でない場合には、理論的説明や解釈、学生の知的学習の支援はできるが、「してみせる」ことができない。この点については、小玉は寺本松野について記した中で、次のように明確に指摘している。「シスターはこれが看護だと、言葉になっているほどのことはすべて、姉妹たちに自らしてみせられた。A”でもなく、Aだということまでを、言葉によって



日本赤十字看護大学実習連絡会議資料より転載

図1. 臨床実習に関する大学と施設の連携

伝えたのではなく、してみせることによって学ばせた。……今日の学生も“してみせてほしい”と願っているのではないだろうか。それがかなわないのは、思い切って言う、教員ができないからである。」(2003, p.268)

では、教育能力と臨床能力をバランスよく兼ね備えるにはどうしたらよいか。もちろん、二つの能力を高める個人的努力も必要であるが、臨床指導者と教員が、互いの能力を生かし、学生に関わることができればよいのではないか。しかも、基本的に学生の教育に責任を持ち、学生に近い立場にいる教員と、患者のケアに責任を持ち、患者に近い存在の臨床指導者では、立つ位置が異なり、見えてくるものも異なる。教員と臨床指導者が、互いに話し合い、補い合える関係づくりが重要である。

教育と臨床が、互いの力を補い合うためには、

日々の実習指導の中で、教員と臨床指導者との関係を築いていくという個別の努力だけではなく、組織全体としてのしきみを整えることが、病棟での実習指導を支えることになる。図1は日本赤十字看護大学と日本赤十字社医療センターとの実習に関する連携体制を示したものである。実習指導の手応えを、あらゆるレベルで確認する場を作っていくことが、連携の質を高め、学生の学びを深める実習の場づくりにつながる。

文献

- Wiedenbach, Ernestine (1969)／都留伸子・武山満智子・池田明子訳(1972). 臨床実習指導の本質. 現代社, 10-19.
- 聖母女子短期大学同窓会・小玉香津子・寺本松野(2003). シスター寺本松野—その看護と教育—. 日本看護協会出版会, 267-268.

指導連携のための基盤づくり

高橋美佐子

高松赤十字病院は、平成14年度後期から日本赤十字広島看護大学の母性看護学実習を受け入れることとなった。当院は、専門学校の実習施設としては長い歴史を持つが、大学教員と連携をとりながら実習指導を行うのは初めてである。しかも、1週間という短期間実習で、一度に15人の学生を受け入れるという厳しい状況を、どのようにすれば満足のいく実習になるのか、大学教員と話し合いをすることから始まった。まず、大学で作成されていた母性看護学の実習目的・目標を見て、最初の1週間の当院では、「対象理解のためのアセスメント」の部分だけを重点的に習得させ、その後、他院で2週間行う「受け持ち対象への個別性のある看護」に活かすための、いわば準備実習をすることになった。

実際に実習が始まってから、さまざまな問題が見えてきた。看護師長として、どのように現場を動かして問題解決していったかを以下に述べてみたい。

まず、学生の朝の計画発表についての調整を図った。スタッフ全員に向けて、全員の学生が計画を発表するというのは、時間がかかるし、効率が悪い。このような状況を見てとり、計画発表する時間や内容、発表する相手を、現場の状況や流れに沿うように、教員・臨床指導者・看護師長で話し合い、工夫改善していった。次に、学習効果を短期間で上げるために、学生が良い看護実践モデルから学ぶ機会を作る調整をした。優れた臨床能力を持っているスタッフを学生の実習に意図的に配置した。そして教員には、学生の学習効果が高まるように、学生が具体的に何を知りたいのかを把握し、明確にスタッフに伝えてほしいとお願いした。さらに、臨床指導者には、学生・教員・スタッフ・患者の全体を常に見渡して、その時その場で不足して

いるものは何かを見きわめ、自分のとるべき役割を判断しながら行動してほしいと伝えた。なぜなら、実習指導1年目の教員は、実習記録をどう指導すればよいかと悩み試行錯誤している状態だったからである。今の時点で、教員に多くの役割を要求するのは難しいと思った。そして私は、学生カンファレンスに参加し、看護師長の立場で捉えた学生への評価を必ずフィードバックし、学生の意見に対して、実践的な意味づけができるように助言していった。この状況を見て、新人教員が何らかの指導の手がかりをつかんでくれればという思いで関わっていた。

以上のように、大学の実習を受け入れ始めた時期においては、現実の状況下にふさわしい連携の仕方を柔軟に創り出していく努力が欠かせない。すなわち、指導連携のための基盤づくりをするという認識が重要だと実感している。そして、「教員・臨床指導者・学生の変化成長を信じて、見守り支援する」ことが、この時期における看護師長の役割であると考えている。

看護は実践が大事である。看護実践能力は実践の場で作られるものであり、教員や臨床指導者の指導能力もまた、それぞれが自分の足りないものに気づきながら、実践を通して成長していくものである。これは、私がスタッフ育成に関して、常に基本にしている考え方でもある。看護師長の「あなたは成長すると信じている。そのためのフォローは惜しまない。共にやっぺいこう。」といったメッセージが一人ひとりに伝わるのがチーム作りの基本だと思っている。半年経った現在、教員も学生も、確かに少しずつ進歩している。今後は、さらに、より質の高い看護を目指して、学生とスタッフが共に考え探求していけるような実習環境を作っていきたい。

大学教員が行う実習施設での研修を素材にして

唐澤由美子

実習指導がよりよく展開されるために行う準備にはいろいろあるが、多くの大学教員（看護学助手）が行っている実習施設での研修に着目して、これを素材に実習施設と大学との連携について考えてみたい。

2002年8月に公立の看護系大学29校435名の看護学助手を対象に、教員が行っている「実習施設で行う実習指導前の研修」について実態調査を行った。その結果では、約84%の教員が研修を実施していた。研修を行う理由は「指導が始めてであり不安だから」が最も多く、ほかに「上司の命令」「研修システムがある」が主なものだった。一方、研修を行わない教員が約15%おり、その理由は「必要性を感じない」「時間的余裕がない」「実習場所での看護経験がある」「現場に迷惑をかけるだけ」などであった。その結果から研修を行うかどうかは、教員の必要性の自覚と時間的余裕によって決まってくるように思われた。研修を行う目的には、①実習施設の概要を理解する②学生が学習できる機会を把握する③実習施設の人たちとの関係づくりが主な目的であり、初めて実習指導を行う教員あるいは実習指導に不慣れな教員が実習施設の人たちと顔なじみになって動けるようになるといった実習場所への適応が研修の中心的課題になっているようだった。反面、「指導技術を高める」「実習場所の人たちの実習・学生への関心の度合いを知る」「モデルとなる人材を把握する」などを研修の目的にする教員は少なく、教員の教育能力を高めることを主な目的とする研修はあまり行われていないようだった。したがって、研修の方法も日勤帯（日中）の業務へ参加するという形で、実習に入る1～2か月前から週1～2回、スタッフもしくは実習指導者とペアを組んでケアを行っている教員が多かった。

これらの結果から、教員は実習前に実習の準備

として実習施設での研修を行っているが、目的を曖昧なままにして漠然と行い、結果的に現場に慣れることのみで終わってしまっているのではないかと推察された。研修が実習指導に役立つ効果的なかたちでなされるためには、単に教員の現場への適応を研修の中心課題におくのではなく、教員の教育能力を高めるという目的を加えて、その目的を達することができるように方法を考えていく必要があるように思われる。そのためにも、研修のプログラム化、システム化が必要だろうと考える。それは連携の1つの方策になると考える。

教員の研修を受け入れる実習施設の人たちは、教員を受け入れることに慣れていないことで生ずる摩擦や負担感があるだろう。また、教員が現場を詳細にみることを評価されていると受けとめるという誤解が生じるかもしれない。これらを乗り越えて、教員が実習施設で行う研修を実習に役立つものにするためには、実習に関わる現場（実習施設）の人たちと教員（大学）とが実質的に連携することが重要である。研修に来る教員を怖がっているのは始まらない。研修に来る教員を実習施設の人たちは利用するあるいは活用するつもりで受け入れる。たとえば研究について相談をして助言をもらうとか、勉強会を行うとか、教員のもっている資源を活用するとよい。教員は施設・設備、人、物に慣れつつ実習施設の人たちと会話し行動する中で、実習施設が抱える問題や実習施設の人たちの関心等を知り現場を理解する。相互に現状がわかってくるとお互いの強み・弱みをどう活用しどう補いあうかを調整できる。持ちつ持たれつのgive & takeの発想で教員の実習施設での研修がなされれば、お互いの質が高まりかつ、つながりが強く深くなるのではないかと考える。